

# 新文化運動に対する劉咸炘<sup>りゅうかんきん</sup>の態度\*

歐陽禎人（武漢大）

翻訳：ハンデンシ（東北大学大学院）

## 【要旨】

劉咸炘は、道家の「以静制動」の術によって新文化運動に向き合い、心性・情欲の区別に重点を置く伝統的な心性学によって新文化運動期における自身の立場を論じた。『周易』の「離」「坎」「艮」「未済」によって冷と熱の弁証法を討論し、新文化運動における「冷は、熱の本」という重要観点を提出しただけでなく、中国のその後ほぼ一世紀におよぶ波乱万丈の歴史に対し、すでに人並外れた予測を提出していた。彼は「勢を察して風を観る」、「源流を考鏡す」という学問方法を採用して、新文化運動の核心人物である胡適と周作人の学術の淵源とその本質を明らかにした。盲目的に流行に追従することに反対し、人々の耳目を一新させた。劉咸炘はみずからを西化派でもなく、守旧派でもないと呼称した。「西洋を見る方法は中国を見る場合と同じであり、新を見るのは旧を見るのと同じである」という原則を堅持し、古今東西の学術思想のすべてを筆端に載せ、すべてを包み込み、百川を納める海のように、中国文化を整合し再構築することこそ、彼の学問理想であった。

劉咸炘<sup>りゅうかんきん</sup><sup>1</sup>が「半分は友人、半分は私淑の弟」と自認した五四運動期の著名な青年詩人であった吳芳吉<sup>2</sup>は、劉咸炘の画扇「觀潮図」の題詩に、「海底の竜魚は、浪を驚かすことなく、万里に扶揺するも未だ名を為さず。蓬山の上に真人の在る有り、坐して天の清く地の太平なるを看る」<sup>3</sup>と記した。吳芳吉は大きな世界を見た人物である。彼が劉咸炘を万里に羽ばたくも名利を図らない海底の竜魚であり、清らかな天と太平なる地を蓬山に坐しながら眺める真人であると形容したのは、その慧眼の独り到了ところである。著者は、劉咸炘の『冷熱』『看雲』『為己』『患盜』『女婦』『賓萌』『菊頌』『時變』『墨乱』などの文章を読んだ後、劉咸炘が新文化運動の時代の中に身を置き、新文化運動に対して自ら深刻な評価態度を取らざるを得なかったことに、深く思いをめぐらせた。これは重要な問題であり、真剣に向き合う必要がある。本論は『推十書』の関連文書に基づいて、その深奥を闡明して、劉咸炘の新文化運動に対する態度について必要な探求を行い、大方の教示を得んとするものである。

—

およそあらゆる事件の発生には、必ずなんらかの予兆がある。劉咸炘には、新文化運動の到来にたいする鋭敏な予感があった。早くも 1918 年 5 月に、『冷熱』『為己』『患盜』などの文章を書いて、彼は「熱」に対する態度を表明していた。1922 年から 1925 年にかけて『時変』『墨乱』『看雲』などの重要な文章を次々と書き、新文化運動に対する見方をさらにはっきりと表明した。当代の国学の大師として、中国伝統文化の土壌の中で成長した劉咸炘は、「任天円道」の中国文化によって、世界中の各種の学術思想を整合し、貫通させることに努めた。その態度は謹厳で、その視角は独特で、その思想結果は人びとを刮目させ、実に人びとに驚嘆の声を挙げさせた。

劉咸炘は、けっして新文化運動を毛嫌いするような発言をしたことはなかった。『推十書』の中で新文化運動を話題にするときは、彼はつねに誠心誠意、客観的な態度で、事柄に即して論じた。たとえば、『語文平議』（1928）の叙述は、かなり客観的なものである。彼ははっきりと中国文化の継承に足を置きながら、「変には須く其の体を失わざるべし。質には須く其の節を失わざるべし。変にして体を失えば、則ち類型混乱す。質にして節を失えば、則ち血肉剥削す」<sup>4</sup>と言う。中国文化を堅持しようとする劉咸炘の根本態度は明白である。

「学校の課規は、語を以て初基と為し、仍<sup>な</sup>お文を以て進級を為す。然れども初めに止<sup>た</sup>だ語を学ぶのみなれば、文基<sup>す</sup>已に失われ、加うるに深を悪み易を楽しむを以てすれば、能く文に通ずる者、必ず日びに希<sup>まれ</sup>にして、将<sup>まさ</sup>に學術の源をして巨著鴻編に在らずして、雑誌小報に在らしめんとす。言を以て普<sup>あま</sup>ねく教うれば、吾れ其の降教を見んのみ」<sup>5</sup>。もしも学校教育がただ中国語の文法と口語のみを主体とするならば、数千年来の中国文化・経典文書は日々衰微に赴く。「巨著鴻編」は二度と學術の源とならず、「雑誌小報」が国民の精神生活の中心となる。そうなった時、中国文化の原典を読みこなせる人はますます少なくなり、伝統の国学は日増しに劣化する。それから 80 年余の今日、中国の文章の墮落の歴史は論じないとしても、中国の伝統文化の流出の歴史は、不幸にして完全に劉咸炘の予言どおりとなった。

だが、劉咸炘は「中体西用」論者ではない。彼は定見のない学者がわいわいと騒ぎ立てることに断固反対した。彼は『時変』（1922）の中で、「今の学者の、変を以て相<sup>あい</sup>誇るは、吾が聞く所に異なる。先士、此に于<sup>おい</sup>て之を論ずること詳らなり。聊<sup>いさ</sup>か之を粗述して、以て吾が党に告げん。章実齋曰く、学業は、風気を辟<sup>ひら</sup>く所以なり。風氣既に弊<sup>あ</sup>れば、学業

以て之を挽くこと有り。好名の士は、方且に風気に趨きて学業を為す。是れ火を以て火を救うなり。(中略)今の所謂変を知る者は、争いて浮漚を為すのみ。夫れ学の去取は、將に義の是非を以てするか、抑そも時の従違を以てするか<sup>6</sup>と述べている。要するに、彼は当時の「一犬形に吠えれば、百犬声に吠える」学術状況を、「時を逐いて是非なき」誤りと考えた。つまり、劉咸炘はけっして新文化運動に反対したのではなく、付和雷同的な流行の追従に反対したのである。

彼は自身の性格を「耐冷悪熱」とみなし、喧噪を喜ばなかった。彼は『冷熱』(1918)の中で「陳書を喜んで独り坐し、衆聚まり声喧しければ、則ち欠伸して臥を思う。慶弔に与りては、半日快からず<sup>7</sup>」と書いた。これを一種の生活感得として、学術・人生・社会、ひいては哲学にまで推し及ぼした。

古は心を言いて血を言わず、惟だ冷以て事を治むべし。物に入られず、乃ち能く物を善くす。世に流されず、乃ち能く世を治む。章実齋これを言いて曰く、風気に随いて転移を為す者は、愚人なり。自得して以て風気を救う者は、智者なり、と。龔定庵これを言いて曰く、百の酣民は一の悴民に如かず。百の悴民は一の之の民に如かず、と。之の民とは、山中の民なり。斯の二人は、能く熱に時に冷なる者なり。<sup>8</sup>

劉咸炘は著作の中で、いつも章学誠と龔自珍を手本に掲げて、自らの観点を補強する。ここでもこの二人の先賢の高論によって、彼自身が主張しようとする「夫れ冷とは、熱の本<sup>9</sup>」という観点を表明する。劉咸炘は自身の「冷」の態度、「静」の立場を堅持して、新文化運動と一定の距離を保って、道家の「静を以て動を制す」「静は躁しきの君なり」の手法を採用する。みずからを「自得して以て風気を救う者」である「山中の民」とみなし、天下のあらゆる人々が血迷って醜態を演じ、手がつけられないほど熱狂している時に、冷静さを保持する。劉咸炘から見れば、ただ「能く熱の時に冷なる者」が時代の上に立つてこそ、時代の進むテンポの生み出す偏差に基づき、「回天」を成し遂げることできる。今日にあって、われわれは劉咸炘の観点到完全に賛同するものではないが、しかしいずれにせよ、劉咸炘のこのような理論の高さと目標の貴さ、人生の理想に含まれた気概と胸襟には、感服せざるを得ない。

さらに、劉咸炘は心・性・情・気・欲などの伝統的な心性学・性情学の面から、冷と熱の弁証関係に対し、自身の新文化運動における態度と立場に対して、興味深い議論を展開している。

心に性有り、情有り。煦煦なる者は情にして、性に根ざす。之を温と謂うも、熱と謂うべからず。蒸蒸然として熱き者は、人の気なり。幽幽然として温なる者は、人の心なり。性の体は止水の若し。禪家は性を得ずと雖も、而れども虚を致し静を守るは、固より心の本体然るなり。五藪の欲、心に中れば、血気は乃ち潰として熱し。血気なる者は、欲の凭る所、外鑠の附する所にして、身有りてのち之有り。天賦の本然に非ざるなり。且つ心と性とは異なる。心は浮にして炎、性は沈にして静。故に血気は心と言うべからず。心は又た性と言うべからず。血を以て性を言え、則ち申槎の欲、以て剛と言うべく、朱家・郭解、以て先王の六行に当たるべけんや。彼の任侠なる者は、天下を乱るの猖夫なり。軟媚に激して然るは、其れ中孚の道ならんや。夫れ氣質の欲に動かずして後に性見われ、性見われて後に倫誼全し。勢利の染に動かずして後に道完く、道完くして後に治術具わる。未だ心の炎に任せて能く天下の理数を燭らし、天下の誠素を緝むこと有らざるなり。汲汲として之に趨くは及ばざるが若し。而るに自ら心に世道有りと言えは、其れ恵子の所謂「逐う者も亦た東走する」ならんか。<sup>10</sup>

これは、著者がこれまで読んできた、中国古代の心性・性情の学によって現実問題を解決しようとする文章中、最も精彩に富んだ記述である。劉咸炘は孟子・程朱以来の心性学に関する基本路線にしたがって、心・性・情・欲の関係における、天下発展の大勢に対するみずからの態度を表明した。心性学から政治学・社会学に推し及ぼし、「性見われて後に倫誼全し」「道完くして後に治術具わる」という心性・学術・人生の観点をしっかり表明したことは、実に精緻の極みである。

とりわけ興味深いのは、劉咸炘が『周易』の離卦と坎卦から、人性の性と情、学術の冷と熱、社会の盛と衰を論じ、また艮卦と未済卦の関係を、「終りを成し始まりを成す」とした点である。これはたんに中国の『周易』を活用したというだけでなく、中国古典の弁証法を活用したとことを意味する。劉咸炘は、「離は情にして、坎は性なり。離は火たり。火には炎上と曰う。外景なる者なり。坎は水たり。水には潤下と曰う。内景なる者なり。(中略)夫れ水火は、冷熱の準なり。孟子曰く、仁を為すは猶お水の火に勝つがごとし、と。荘生の積水を言うは、理を論うるなり。商書の燎原を言うは、欲を譬うるなり。故に理欲は猶お水火冷熱のごとし。弁ぜざるべからざるなり」、「離は外陽にして内陰。熱極まれば則ち水を生ず。故に月令に溽暑に雨行わると記し、周易に日中沫を見ると著わす。陰の為なり。離は豈に純陽ならんや。坎は外陰にして内陽。冬泉の温、根に帰り命に復し、

正中に位す。坎は乾の体を蘊す。陽固より在ること有り、「艮は終りを成し始まりを成す。易は未済を以て終わる。故に曰く、冷は、熱の本なり」<sup>11</sup>と言う。劉咸炘の家学の淵源は深厚で揺るぎがなく、ゆえにわれわれは、彼が学術の問題を論じる過程において、深く中国伝統文化の経典に根ざし、自由に経典を引用して、様々な観点を表明し、様々な問題を論証する様子を、はっきり見て取れる。彼の経典に対する熟知の程度、思想の掘り下げの深さ、根本に立ち返った独創性の発揮（返本開新）は、どれも人を感嘆させてやまない。ここで彼が『周易』を道具として、陰陽の相互推動と転換を思惟方法とし、天道の水火冷熱から世道の深い哲理を論じて、最終的に「冷は、熱の本なり」という結論を導き出したことは、実に人の意表に出たものである。

劉咸炘の思想体系の中で最も精密なのは、歴史学である。四川省の著名な学者であった蒙文通先生は、その『読四川方志序』の中で、劉咸炘の歴史学を「其の識、已に駸駸として驂騑の前に<sup>かりゅう</sup>度<sup>わた</sup>り、一代の雄にして、数百年來の一人のみ」と評したが、実際には彼の史学思想に焦点を合わせて言ったものである。彼の冷と熱に関する論述は、歴史の有為転変に対する敏感さに満ちた彼の歴史思想を表現したものであり、一字一句が重みをもって、彼の非凡な才能を如実に示している。

悲しいかな、天下の熱に趨くこと、由りて來たること有り。冷熱の相<sup>あい</sup>乗ずるは、常なり。冷を以て熱を馭すること能わず。縦い窮まりて復らざるに至らしむるも、則ち痛く掃除するに非ざれば易<sup>か</sup>うること能わざるなり。火熾<sup>きか</sup>んなれば、大水に非ざれば滅せず。暑極まれば肅殺に非ざれば退かず。盛にして衰え、衰えて疲るれば、兵革に非ずんば革まらず。金風起これば、熱氣消えて、物傷<sup>いた</sup>む。天下一たび鬪争休むも、人稀<sup>まれ</sup>なり。孰れか之を熱からしめて然るを致すや。悲しいかな。且つ冷に由りて発して熱と為るは、順にして以て易し。熱に由りて斂して冷と為るは、逆にして以て難し。冷を以て熱を馭し、逆を順に寓すれば、則ち窮するに至らず。天化は逆を貴ぶ。『易』に數<sup>しば</sup>しば逆を以て、終りを永くし蔽を知る。『易・象』に之を言う。ああ、縦い天下をして至熱ならしむるも、苟くも一旦之を冷まさんと欲すれば、豈に難からざらんや。故に曰く、至寒は裋を累ねて以て温を求むるべきも、至熱は裸すると雖も免れず、と。今の熱なる者は、其れ必ず膚を剥ぐに至りて後に能く已まん。吾れ膚を剥ぐの何<sup>いず</sup>れの時に在るかを知らず。或いは吾が生に当たりて之を見ざらんか、則ち幸いなり。『詩』に曰く、燎<sup>まさ</sup>の方<sup>いず</sup>に揚がる、寧<sup>あ</sup>くんぞ之を滅すること或らん、と。誠なるかな、其の滅し難きや。<sup>12</sup>

辛亥革命以後、中国の形勢はいっそう複雑となった。様々な学術思想が群がり起こって、喧しく騒ぎ立てた。『冷熱』は1918年の作で、そのとき作者はわずかに22歳であったが、かえってこのような冷静な筆致で、上引のごとき文章を書くことができた。これは明らかに劉咸炘が、滔々と迫ってくる五四運動の爆発を予感していただけでなく、数十年後の中国の政治・経済・学術の「膚を剥ぐ」痛みを予知していたことを示している。その深刻な洞察は人々を震撼させるに足る。

劉咸炘の歴史の有為転変に対する敏感さは人々を震撼させ、歴史を引き受けようとする彼の責任感に人々を肅然とさせ、畏敬の念を催させる。彼は言う。「ああ、冷の世に<sup>そこな</sup>賊<sup>そこな</sup>わること久し。官に金の多きを得ざれば、則ち之を<sup>せ</sup>謙めて冷官と為し、事に大なる名利を致すこと能わざれば、則ち之を<sup>せ</sup>謙めて冷淡生活と為す。師儒は、天下の大任なり。而るに以て冷と為す。莊周は<sup>はこや</sup>藐姑射の神人を称して、肌膚は冰雪の若く、大旱に金石流れ、土山焦ぐれども熱せず、其の<sup>しん</sup>神凝れば、物をして<sup>きず</sup>疵つけ<sup>や</sup>癘ましめず、年穀をして熟せしむとす。龔定庵曰く、俄焉、寂然として、灯燭光なし。余言を聞かず、則ち鼯声を聞く。夜の漫漫たる、<sup>かったん</sup>鷓旦も鳴かず。則ち山中の民、大声音の起こる有り。天地これがために鼓鐘し、神人これがために波濤す、と。<sup>あ</sup>懿、斯れ冷の效か、斯れ冷の效か」<sup>13</sup>。中国の歴史・文化がしだいに零落し消滅していくことに暗然と心を傷め、また現実の中国の政治状況を深く憂慮するこの文章は、読者をして扼腕させる。劉咸炘の文章は冷寂かつ高妙で、あたかも空谷に響く音、大象の形無きがごとく、深く人心に侵み込んで、靈魂を触れ動かす。彼の表現方法は冷峻で幽遠だが、そこには未来に対する希望が充満している。とりわけ、彼の「冷」には、中国古代文化に対する希望が充満している。今、この瞬間の「俄焉、寂然として、灯燭光なき」状態は、未来に「大声音の起こる」ことを永遠に抑圧することはできない。中国文化の「天地これがために鼓鐘し、神人これがために波濤す」る時代は、ついに必ず到来する。これは『周易』の「天行健なり」の精神であり、まさに劉咸炘の劉咸炘たるゆえん、われわれが真剣に研究する価値のある、一代の国学大師の精神である。

## 二

注意すべきは、劉咸炘が文章上で正面から新文化運動に反対したことはなかった点である。だが、彼はいかなる時にも、新文化運動の発展に細心の注意を払っていた。その中の一部の過熱化した問題に対し、彼はやむにやまれない場合に限り、中国文化の立場から痛切な時弊の批評を行った。彼は科学と玄学の論争に参加して、『群治』（1923）・『故性』

(1921)・『善悪』(1928～30)・『外書』の『進と退』(1925)・『動と植』(1925)などの重要な文章を執筆した。まずは胡適の功利主義を批判し、ついで梁啓超・梁漱溟の自由主義を批判し、人々を刮目させた。『看雲』(1925)の一文は、劉咸炘の新文化運動に対する思いを十分に表し、さらにそれに対する見方を全面的に提示している。

『看雲』というタイトルは、明人の詩の「寄せおく 將 一幅のせんけい 剡溪の藤。江面の青山は幾層をえがく。筆は到る断崖に泉落つる処。石辺に添うは箇の雲を見る僧」<sup>14</sup>に由来する。雲を見る人とは僧であり、劉咸炘はこの僧を自分にぴったりの喩えとした。ここにおいてこの詩は一種の禅味を生じる。そこから、劉咸炘が主観的に新文化運動と距離を保とうとしていたことは明らかである。しかし、『看雲』の全体から見れば、彼にはまた別の思いがあった。すなわち、岸を隔てて火を見る僧であってこそ、はじめて新文化運動の実質をしっかりと把握できるとの思いである。

筆者がこのように見るのは、劉咸炘が新文化運動をあたかも天上の雲彩がたちまち変幻するように、あっというまに目の前を通り過ぎていく存在と見ていたことによる。「一股の南風吹き、又た一股の北風吹く。一朵の紅雲起り、又た一朵の白雲起る」、「かいとう 盤頭・きげん 鬼臉、随時に換わる」。当時の新文化運動のリーダー（たとえば、胡適・周作人など）は、文化の後ろ盾を全然持たず、自分の姓が何であり名が何であるかすら全く知らず、朝から晩まで「波浪の裏に打ちたぎがり」<sup>15</sup>、自分を救う暇もないのだから、「旗手」の名称を担うことなどできない。

かくて劉咸炘はこう言う。「杜甫の詩に、『天上の浮雲は白衣の如く、ししゅ 斯須に變幻して蒼狗を成す』というのは、世の中の様子を喩えたものである。わたしの言う雲とは、流風の風であり、また今の世に言う潮流である。水で喩えても、風で喩えても、雲で喩えても、みな同じ。温・涼・寒・暑は、みな風のしわざだ。風は時間の変異と言える。雲は山川から出て、湿気によって形作られ、雨の根となる。場所によって気候が異なるのは、潮の湿のせいである。雲は空間の変異と言える。ゆえに雲を見ることは、すなわち風を観ることもである。わたしは道家の変を御する術を用いて、冷眼によってこの風雲の変化を見る。真にこれは陸放翁の言う『高枕して雲を看、一事無し』だ」<sup>16</sup>。まさにこうした態度と立場に鑑み、劉咸炘は新文化運動の時期に多くの人びとが熱中した様々な問題に対して、万やむを得ない場合でなければ、たいてい迂回し、あるいは意識的に一定の距離を保って、なるべくそれに巻き込まれない態度をとった。

たとえば、彼は『語文平議』の中で「白話文の起こるや、辨難紛然たり。文を著すこと

多きも、吾は与<sup>くみ</sup>せざるなり」と述べた。白話運動は新文化運動の前奏であり、当時メンツある人間であれば誰もが応答しなければならない一大問題であった。だが、劉氏の態度は、「吾は与せざるなり」である。しかし、また彼は我慢できずに、「私に<sup>あい</sup>相講習するは、終に黙すべからず。吾が見る所を以て之を論ずれば、主する者・攻むる者、<sup>ふた</sup>両つながら皆な当たる有り、当たらざる有り。攻むる者は、概ね<sup>あらかじ</sup>予め非難して、主する者の故有るを察せず。主する者は遽かに、攻むる者皆な敗ると昌言して、攻むる者の言の実に中る者有るを知らず。皆な疏なり」<sup>17</sup>と述べた。コメントせざるを得ないときにも、彼の語は平穩かつ客観的で、不偏不党の態度によって問題の是非曲直を論じた。まさにこれは、劉咸炘がいつもこのような視角の距離を保って、冷を根本として、熱を馭して行ったことによる。これによって、彼の評論がいったん出れば、それは往々にして紙背に徹し、時弊に切実な議論となった。まことに、これは一種の高踏的な闘争技術、深刻な学術手段であった。しかし、残念ながら、彼は当時四川に住み、文化揺動の中心から遠く離れていた。その後八十年余り、さらに怒涛のごとき政治運動の中で、人々の注意を引くことはなかったのである。

劉咸炘は「正直に言えば、わたしが西洋を見る方法は中国を見る場合と同じであり、新を見るのは旧を見るのと同じである」<sup>18</sup>と述べた。これは新文化運動に対する彼の基本態度である。彼は、自分は西化派にも反対し、守旧派にも反対すると言う。「たいてい一つの新の字、あるいは西の字がつくと、旧派がこれを聴けば、まるで虎狼のように感じて、一瞬でもそれを避けられれば幸いとする。これは義理が深く器量が大きな人でも免れられない。新派がこれを聴けば、南方の珍味のように特別な風味があると感じる。これは世界的な視野があると自認する人も免れられない。実際には、中国と西洋は地理にすぎず、新と旧は時代にすぎず、ともに是非の標準ではない。わたしにはわたしの眼光がある。中国を見るのはこのようであり、西洋を見るのもこのようである。古を見るのもこのようであり、今を見るのもこのようである。彼（西洋）の五彩十色に随って、私の視覚が眩まされることはない。すべて差別せず同等に見るので、怪を見ても怪と思わない」<sup>19</sup>。この語は、筆者に今は亡き、著名な武漢大学の哲学史家の蕭□父の『推十書・前言』中の語を想起させた。蕭先生によれば、劉咸炘先生は「晩清に生まれ、五四運動の新たな潮流とその後の五四運動の過渡期に向かう時代に直面した。中国と西洋の文化は、中国の合流と激動の中で、でたらめにその同異を論じていた段階から、しっかりとその同異を検討して、中西の会通を求める新たな段階に向かって発展していた。彼の重要な論著の多くに、すでにこの文化

思潮の発展の趨勢が反映している」<sup>20</sup>。

これに関し、劉咸炘は『看雲』において、比較的明確に自己の観点を表明している。

まだ見通せたわけではもちろんないが、自然に新と旧、中国と西洋の界限を忘れることはできない。ただ、わたしは嚴復らのように中国と西洋、新と旧を疎通する者ではなく、孫詒讓・王仁俊らのように中国を西洋に附し、旧を新に合する者でもない。正直に言えば、わたしが西洋を見る方法は中国を見る場合と同じであり、新を見るのは旧を見るのと同じである。ギルド社会主義における分治の小単位は、わたしはただ陸機と同じと見る。宋明の儒者を取るべきところあれば、カントにもまた取るべきところがある。宋鉞を取るべきところあれば、トルストイにも取るべきところがある。蘇洵の六経論を取らなければ、自然に社会標準の道德学も取らない。韓非・李斯を取らなければ、自然にホッブスの社会契約論も取らない。

そもそも主義は主義、問題は問題、論は論、証は証、材料は材料、方法は方法であって、混同してはならない。わたしはデモクラシーを懷疑するが、しかし政治学を語ることを妨げない。行為派の心理学には断固反対するが、実験の成果を受け入れることを妨げない。けっして物質文明を主張しないが、サイエンスに反対はしない。<sup>21</sup>

ここにおいて、われわれははっきりと、劉咸炘がすでに完全に彼の学術をもって、世界の文化の大熔炉の中に進んでいったことを見て取ることができる。「西洋を見る方法は中国を見る場合と同じであり、新を見るのは旧を見るのと同じである」とは、西化派でもなく、また守旧派でもなく、完全に自己の研究から出発して、なにが合理的であり、なにが彼の思想表明に有利であり、どのような立場を採ればよいかを判断するということである。これは蒙昧と閉鎖から抜け出て、世界の文化の中に融会した有力な証拠である。劉咸炘はみずからを新旧に対する境目のない人間と謙遜したが、実際には、彼はすべてを包み込み、百川を納める海になろうと試みた。

だが、すべてを包み込み、百川を納める海となることは、けっして中国の文化伝統を不要とすることではない。新文化の旗を掲げて、中国文化を破壊し、「頑迷に現代主義を篤信し」、「時代の先端に立って」、時好に投じる人々を、劉咸炘は「風に順って旗を揚げただけにすぎない」<sup>22</sup>と評した。そうして、その「学術を弁彰し、源流を考鏡し、勢を察し風を観る」という学術方法の長所を発揮して、胡適と周作人を例とし、彼らの中国学術上における淵源を分析し、西洋化の要素という幻想を見破った。

胡適の実験哲学も、周作人の文学も、ただ時間上において中国の古い物が変相しただ

けでなく、空間上においてもやはり中国の風土の結晶体である。詳しく言うなら、胡適は近來もっぱら細かな考証を工夫する。彼の学問が、清朝の考証学の科学であることは、知らない者はない。彼は安徽省徽州績溪县の人である。績溪胡氏は、徽州派考証学の名家である。この学派の代表的な人物は、朱子を祖師とした江永である。ゆえに章学誠は、徽州の考証学の淵源は朱子であると説いた。胡適も朱子は鋭い眼識を持っていると説いた。彼は清朝の考証学の方法を朱子から説き起こしている。徽州人はどうしてこのような風気を持っているのか。これは、その地域の人々が多く商業を営み、はかりごとに長けているからである。プラグマティズムは、もともと功利派の下流であり、墨子の精神と同じである。徽州人の算盤をはじく性格は、ちょうど墨子の功利派の算盤をはじく方法と合致している。それゆえ、胡適のプラグマティズムを生み出した。胡適は、章学誠を紹興出身の会計係の臭いを脱しないと述べた。章学誠の整然とした分類と、類例・故事を重んじる精神は、確かに紹興の気風である。しかし、わたしは胡適もまた徽州商人の習気があると言おう。胡適ファンは怒ってはいけない。周作人の文学は、もっぱら自己表現を主として、社会判断さえも反対する。彼は浙江省紹興会稽県の人である。清代に浙東学派があった。この学派は黄宗羲に淵源し、その後伝わって章学誠に到った。黄宗羲の『明文案序』には、情を主とする説を明白に主張し、章先生が文を論じる際にも、やはり情を主とした。彼らはもっぱら自己に由る周作人の方法の先祖である。周作人の文学論は、科学の眼光をまったく棄て去り、神話さえも尊重する。これは章先生の伝授した詩の教えである。彼が章先生を宗と仰ぐと明言したわけではないが、実のところ浙東人の伝奇的性質をもっている。浙東人の伝奇的性質は、証拠が非常に多い。周作人自身にもそうした趣旨の文章があり、その一端を露呈している。このように見てみれば、彼らにどのような特殊な南方の風味があらうか？<sup>23</sup>

中国の伝統文化の源流の上に立ち、新文化運動の「旗手」の学術の淵源を討論するのは、いかにも人を驚かせるやり方だ。胡適の実験哲学がデューイのもとで学んだアメリカの哲学体系に依拠し、それをかなり斬新したものらしいことは、周知の事実である。しかし、劉咸炘のこの指摘により、胡適はもともと考証学の名家に生まれ、彼がデューイの実験哲学を学んだのには、そもそも深い受容基盤があったことが、誰にも明瞭となった。彼の文化的ルーツは、すでにその学術方向の価値と選択を決定していた。彼の実験哲学は、根本上から言えば、ただ胡氏考証派の名家が現代の新文化の風雨のもとに咲かせた一枚の「返

本開新」の花びらである。したがって、胡適が墨子を評価したのは偶然ではなく、功利主義を鼓吹したのも偶然でなく、全身から「徽州商人の習気」を発散している。劉咸炘の評価の筆致は紙背に徹し、きわめて犀利で、人の耳目を一新し、精神を一振させる。

ここで、劉咸炘は確実な証拠によって、胡適と江永ら安徽考証学派の関係を明らかにし、周作人と浙東学派の黄宗羲との関係を明らかにした。この激動の五四運動の時期にあって、真に西化派の顔色を失わせた。しかし、劉咸炘の『看雲』には、新文化運動に反対し、西洋学習に反対する思想は微塵もない。彼の考えでは、西学の旗を振る人は「彼らはみな波のなかに翻弄されているので、船中の人とみずから言うことはできない」<sup>24</sup>。この話の裏には明らかに言外の意図があり、胡適に対する辛辣な批評となっている。劉咸炘が言うのは、自分の姓が何であり名が何であるかすらまったく分かっていない胡適には、「新文化運動の旗手」として、そのような大きな旗を担うことなど到底できない、ということである。

『看雲』の最後で、劉咸炘は自身の観点を正面から提出している。彼は言う、「中国人の性格は本来、極端には走らない。したがって国外の極端な学説は、中国人の脳裏に到ると、互いに融合して、押し合いへし合いしながら落ち着く。胡適は蛮力を奮って、イプセン主義をわめき立てた。ただ、イプセンのオール・オア・ナッシングの主義を、胡適は一度でも実験したことがあるだろうか。最も憐れむべきものは、むしろあの盲従して声に応じる輩だ。しかし、こんな人には表裏があり、同じことを言い、同じことをする。まさに変態心理学者の言う二重人格である」<sup>25</sup>。面白いのは、劉咸炘がきわめてハイカラな「変態心理学者」「二重人格」という西洋の科学用語を用いて、いわば汝の矛を以て汝の盾を攻めて、暗々裏に一步進めて中国と西洋の学術を融会貫通する立場を表明している点である。これを武器として胡適の実験哲学と功利主義を攻撃し、全世界の学術を「互いに相い容れる」という自己の重要観点を樹立し、新文化運動に対する高見を表明した。これは、並大抵の手腕ではない。

しかし、儒教の中庸の道と道家の上善水の如しという教えを信奉した劉咸炘は、このような時代環境の中で、遠く新文化運動を離れ、退いて三舎を避けた。岸を隔てて火を観ることで、その眼光はきわめて透徹していた。彼自身の語を借りれば、それはつまり「黄鶴楼の上で転覆する船を見ると、ただ汝が皮相でないことを求めれば、どんなものでも見える」<sup>26</sup>。火を見るがごとき明らかな目的である。劉咸炘の立場から見れば、新文化運動は一つ一つ、次々と、深く考え、速やかに解決せざるを得ない理論上の問題を、彼に提出した。彼はこの一連の問題に向きあって、中国文化の再構築と更新に潜心した。著者の考

えでは、それこそが、その短い生涯に関わらず、輝かしい学術成果を劉咸炘が創造できた根本原因の一つである。

## 注

\* 編集者注：本論文は、『蜀学』雑誌第六期上（巴蜀書社、2011）に掲載された論文（中国語）を、著者と『自然と実学』発行者の承諾のもと、広く日本語読者層に提供する目的で、日本語に翻訳したものである。

なお、引用された劉咸炘の文章の翻訳に当たって、いわゆる訓読体にした場合と現代日本語訳にした場合があるが、これは史料の性格によって、原文の様子をある程度伝えられるようにするか、或いは読者の意味把握読を優先するか等を鑑みた結果である。諒とせられたい。

<sup>1</sup> 劉咸炘（1896～1932）、字鑑泉、別号宥齋。祖籍は成都の双流で、儒学をもって家業とした。学者である蒙文通、唐迪風と親交がある。武漢大学の哲学史家である蕭蕙父は『劉鑑泉先生の学術思想と時代的意味』の中で、「劉鑑泉先生の考えは独特な思惟様式によって、巨大な学術成果を獲得した。近代蜀学の中でもっとも優れた花を咲かせた」と称した（『吹沙二集』、巴蜀書社、1999年、454頁）。蕭蕙父はまた劉咸炘の『推十書・序』の中で、『推十書』は夭折した天才学者である劉鑑泉の重要な著作である。彼の哲学思想、諸子学、史志学、文芸学、校讎目録学及びその他の作品をあわせて、二百三十一種類、四百七十五巻である」と論じている。（氏著：『吹沙二集』、巴蜀書社、1999年、460頁）陳寅恪、梁漱溟などの学者が劉咸炘の学術成果を褒めている。しかし、様々な原因によって、学術界では彼の思想はあまり注目されていない。

<sup>2</sup> 吳芳吉（1896～1932）、重慶江津人、字碧柳、号白屋先生。世に白屋詩人と称されている（『江津県志』）。優れた才能を持ち、二十世紀20年代における中国の著名な詩人である。武漢大学の哲学史家である蕭□父は、「吳良吉は五四運動期における中国の新体詩の開拓者の一人である。彼の詩は民間の貧困と困難、時代の潮流を反映した」と述べた。蕭□父によれば、吳良吉は劉咸炘の「半友生半私淑之弟」と自認した。彼らは、「二人の心声は、おのずから呼応し、二人の徳業は、さらに燦然と交わり輝き、ともに『天地英靈の気、古今卓異の才』であった。彼らを近世蜀学中の双子座と言っても過言ではない。（蕭□父著：『推十書・前言』（増補全本）、『推十書』（増補全本、庚辛合輯一）、4～5頁）

<sup>3</sup> 劉咸炘『看雲』、『推十書』（増補全本、庚辛合輯）、上海：上海科学技術文献出版社、2009年、242頁。以下、『推十書』（増補全本）の引用文はすべて上海科学技術文献出版社2009年一月版より引用する。再び説明しない。

<sup>4</sup> 劉咸炘、『語文平議』、『推十書』（増補全本、戊輯一）、68頁。

<sup>5</sup> 劉咸炘、『語文平議』、『推十書』、67頁。

<sup>6</sup> 劉咸炘、『時變』、『推十書』（増補全本、甲輯三）、874頁。

<sup>7</sup> 劉咸炘、『冷熱』、『推十書』、857頁。

<sup>8</sup> 劉咸炘、『冷熱』、『推十書』、857～858頁。

<sup>9</sup> 劉咸炘、『冷熱』、『推十書』、858頁。

<sup>10</sup> 同上。

<sup>11</sup> 劉咸炘、『冷熱』、『推十書』、858～859頁。

<sup>12</sup> 劉咸炘、『冷熱』、『推十書』、859頁。

<sup>13</sup> 劉咸炘、『冷熱』、『推十書』、860頁。

<sup>14</sup> この詩は、清朝の查為人の『蓮坡詩話』に載せられた一首である。一人の越僧が「明の

四大家」の一人である沈周に絵を求め、そのためこの詩を作って沈周に与えた。沈周はその詩を見て、欣然として同意し、その詩意に拠って絵を描いた。越僧の姓も名も分からないが、わずか一篇の詩で、当時名声藉藉たる沈周に欣然として筆を取らせたことからすれば、この越僧もやはりそれなりの輩であっただろう。沈周（1427～1509）は、明の画家で、字は啓南、号は石田、長州（今の江蘇呉県）相城の人、山水画に長じた。

15 劉咸炘、『看雲』、『推十書』（増補全本、庚辛合輯一）、241～242 頁。

16 劉咸炘、『看雲』、『推十書』、239 頁。

17 劉咸炘、『語文平議』、『推十書』、68 頁。

18 劉咸炘、『看雲』、『推十書』、240 頁。

19 同上。

20 蕭蕙父、『推十書・前言』（増補全本）、『推十書』（増補全本、庚辛合輯一）、3 頁。

21 同上。

22 同上。

23 劉咸炘、『看雲』、『推十書』（増補全本、庚辛合輯一）、241 頁。

24 同上。

25 劉咸炘、『看雲』、『推十書』、242 頁。

26 同上。